

逆に α を実験的に求める事により最低励起状態の縮重度が判断できる。

以上の議論は吸収端の異常にも始状態で励起された電子の phase shift を考慮すれば、同様に適用できる。

- 1) S. Doniach and M. Sunjic, J. Phys. C, 3 (1970), 285
- 2) K. Yamada and K. Yoshida, Prog. Theor. Phys. 62 (1979), 363
- 3) J. S. Langer and V. Ambegaokar, Phys. Rev. 121 (1961), 1090
- 4) A. M. Bradshaw, W. Domcke and L. S. Cederbaum, Phys. Rev. 16 (1970), 1480.
- 5) N. D. Lang and A. R. Williams, Phys. Rev. B16 (1977), 2408

16. 吸着層における IC-IC, IC-C 転移

東大物性研 斯波 弘 行

グラファイトを下地とする(a)重い希ガス原子 (Ar, Kr, Xe) のモノレイヤーあるいは(b)簡単な分子のモノレイヤー、及び金属を下地とする(c)重い希ガス原子層 (Cu, Ag の様々な結晶面, Pd, Nb などの上の Xe, Ar) あるいは(d)アルカリ金属 (W 上の Na など) モノレイヤーで、下地とモノレイヤーの三角格子の間の相対関係について様々な興味ある実験の報告があり、まずそれを簡単にレビューした。その後、この中で最も簡単な系であるグラファイトを下地とする重い希ガスモノレイヤーに対する理論研究 —— 下地とモノレイヤーの結晶軸の回転角 θ の問題、 $\theta \neq 0$ の不整合相 (incommensurate, IC) と $\theta = 0$ の不整合相の間の相転移、不整合、整合 (incommensurate-commensurate, IC-C) 相転移について —— の現状を話した。